

三十六 日本精神史をたどる

広告で『日本精神史』という書物が出版されたことを知った。塾を開いて在野で哲学の思索に励む人長谷川宏の著作だ。この列島に生きた人々の精神の歴史という関心を引くテーマを、哲学者が論じるのである。わたしは、インターネット書店のページを開いて注文しようとした。ところが、同じように関心をもった人がすでに読んでいて、レビューを書きこんでいる。上巻と下巻に対して、「歴史書のさわりをなぞるだけの精神史」、「深さが足りない。新たな切り口を期待したがだめだった」と、とても厳しいコメントをし、評価点は五段階の最低1。わたしは気持ちをそがれて、注文をとりやめた。しかし著者は、ヘーゲルの重要な哲学書『歴史哲学講義』や『精神現象学』などを翻訳し、自作の書物も出版している哲学の徒だ。その著作が一言で一刀両断されるような程度というのも信じがたい。しばらくして、とにかく手に取ってみる値打ちはあるだろうと考えなおし、購入した。

本の帯に、「一気呵成の二〇〇〇枚超。ヘーゲルの清新な翻訳から二〇年余、著者畢生の大作、ついにになる!」、「日本の美術・思想・文学を人々の精神の歴史として流麗な文

体で描ききった比類なき傑作!!」という文字。畢生の大作に一気呵成という言葉をかぶせる言語感覚は少しおかしいが、よほどの名著だと宣言している。これを読んだ人のレヴェューとの落差はいちじるしい。どうしてなのか疑問をいだきながら、読み始める。

厳しい批評に引きずられて、どうしても用心しながら読んでしまう。最初の四つの章は、三内丸山遺跡、火炎土器と土偶、銅鐸、古墳を主題にする。対象は同時代の書かれた史料のないもので、先史と言える時代のことだ。著者は、仏教の受容を扱う第五章で、聖徳太子が『三経義疏』を書いたのではないとする新しい知見をとり入れるほかは、縄文時代と弥生時代について、従来の古い歴史解釈のままに、水稻耕作が紀元前三〇〇年ころ始まり、わずか五〇年ほどの短期間で九州から近畿まで広がったとする。第四章・第六章の古墳と『古事記』の時代についても、『記・紀』に書かれた記事を批判なく受け入れ、近世・近代以来続く古代史解釈の流れに沿って歴史を理解し、そのうえで対象を評価しているように見える。そういう歴史理解は、本質的に解釈の作業と言える著者の方法からして、それぞれの時代の社会と人々の暮らしに根ざした心持の解釈に影響しないわけにいくまい。

しかし、炭素¹⁴を用いた年代測定によって、水稻耕作は紀元前千年近くまでさかのぼることが明らかになっている。縄文時代から弥生時代への移行の歴史は組み立て直しが必

要なのである。『古事記』が書かれた時代までの歴史についても、無視できない疑問が提出されている。古代の説話についての著者の解釈と鑑賞を否定するつもりはないが、第六章までの題材について、歴史解釈にあまり依拠しない考察が必要だったのだと思う。ところが著者は、現在定説として形成されている歴史理解を記述しながら、さらに解釈を広げて古代人の心を推察し、思い入れを込めて鑑賞する。これが、T・ジャットの言う「物語に必要な本当らしさ」を弱めて、「物語を語る際の確信の度合い」を薄めている。そこでは、「流麗な文体」がむしろ本当らしさから遠ざける働きをしている。引用したレビューを書いた人は、ひよっとしたら、最初の数章のこういう書きぶりに不満を感じて、評価を下したのかもしれない。対して著者は、日本列島に現われた精神を時代順に記述する立場から、こういう章立てにしたのだろう。だが、書物の質を傷つけないために、初めの方は、後続する時代へのつながりを準備するだけにして、書き過ぎずにあっさりと要点をおさえることにした方がよかったのではないだろうか。

不満を感じながらも、性急にならないように注意して先に進む。用心して読むわたしには、歴史時代になっても、歴史の流れのとらえ方に精確さが欠けると思われるところがあつた。第十四章で、『今昔物語』を「時代の大きな移り変わりを示す書物」ととらえ、時

代の背景を「支配貴族の凋落という社会変動」や「旧支配層の衰退」と書くことに、大きな誤りはないだろう。しかし、十二世紀前半に書かれた『今昔物語』と、十二世紀後半に描かれた絵巻物を同じ章に置き、法然を考える第十七章で、地方官人だった法然の父が荘園の預所の夜襲を受けて殺された十二世紀前半を、「乱世の激動は地方の村にまで及んだ」とする表現は適切でない。「平安末から鎌倉時代へと移る激動の時代」ととらえるのは正しいだろう。だが、保元・平治の乱の起きた十二世紀後半を十二世紀前半とならしてとらえる見方に、わたしは疑問をもつ。土台にある社会の変動はたしかに連続的に続いていただろう。それが武士の台頭ということだ。しかし院政期、土地支配のあり方が変化し、皇族や摂関家などの上級貴族の支配に受領層の中級貴族が食いこんでいくことと、在地での武士の土地管轄権が強まるのが平行して起きていたのだが、十二世紀前半の在地の武士のあいだの闘争は、まだ合戦と呼ばれるほどの戦いではない。京都の支配層は、時代の移り行きをうすうす感じていたとしても、まだそれとして明確な意識はなかったのだと思う。「乱世の激動」という認識が一般的になったのは、現実に保元・平治の乱が起きてからだろう。社会の変化はゆるやかに進むときと流動するときがある。京都で戦争が起きてから目に見える変化になったはずだ。この観点が移り行く時代の精神を考えるのにも必要だ、とわたしは考える。仏教思想の変化をたどるときにも、この書物は推移を十分書いている

のだけれど、おおざっぱに「末法の世」という言葉を使うのでは、社会の変化が及ぼした精神現象の微妙な差異がこぼれおちてしまう。

もう一つ、その仏教思想の論じ方にも不満をもった。第十章の最澄と空海のところで、二人の高僧についてよく知らないわたしは哲学者の論評を聞きたかったのだが、その思想は十分に論じられていないと思う。法然と親鸞についての第十七章でも、宗教と信仰の考察が徹底していないと感じた。『歎異抄』の「悪人正機説」が、普通の解釈でしか記述されていない。親鸞が自分を悪人ととらえていると言及されているのにそうだ。この逆説には、いったい本当の善人がいるだろうかという倫理的な問いが含まれていると考えるべきだ。自分を含めて人間に善人などいないと知って、それでも救われるとすることは、たんに人々に救済を説いて安心を与えることではない。ここには、信仰の核心である「信」の問題が横たわっている。哲学者がその問題を論じないことに失望した。

対して、上巻最後の第十八章で『正法眼蔵』を読み解くところは精彩がある。強くてしなやかな道元の理論は、ヘーゲル学徒に論じやすかったのだろう。わたしは、著者の現代語訳とその解釈に教えられ、考えさせられるところがあった。

どうも目くじらをたてる読み方をして、多くは枝葉の記述の不精確さをあげつらうこと

になってしまった。こうなったのは、書名に期待して読み進んだのに、予期した論述に出会えなくてフラストレーションを感じたせいである。わたしが書名から期待していたのは、哲学者としての著者が、日本に生きた人々の示した精神を浮き彫りにし、それがどのようなものであったか、どのように変化したか、歴史をつらぬいて存在する特徴は何か、などの考察であった。しかし、どうも主眼はややこしい議論にあるのではないらしい。たしかに著者は、日本の歴史に現われた精神の現象について、今言ったようなことを記述しようとしているのだろうが、議論はそれほど徹底したものではない。

この書物はむしろ、広く読者に日本の歴史的・精神的現象を解説することにあるようだ。三十五の章に分けて主要な題材をとりあげて、さまざまな過去の精神の現われを、大部ではあるが一つの書物に記述して通観することに眼目があるのだ。記述は、題材をまず提示して説明し、その主要なところを解釈し、さらに鑑賞する、というふうに進む。各章は分量的に制限されているから、考察は深みに入ることができないのだ。残念ながら、議論が日本から出て外国の精神史との比較まで広がることもできない。しかし、著者の構想は大きなものである。わたしは、なじみのなかった多くのことを知ることができ、日本で生じた精神現象のおおよその見取り図を描けるようになるだろう。

長谷川宏が哲学書の翻訳で評価されたのは、哲学の文章なのによくこなれていて理解し

やすいという点だった。こんどの著書の文章を意識して読んでみて、その特徴が分かった。強い語句が選ばれ、それらが畳みかけるように連続し、同じような文章がくり返し現われて、段落が何度か波打つようにして論が進んでいく。読者は、その文章に乗せられて著者の思索に同化すれば、臨場感を感じながら追体験することができる。そう感じれば、本の帯の称賛がまんざら間違いいではない。美術品や文学作品について、思い入れたっぷりに語る文章は魅力的である。もともと情緒的な対象について、評論が独断論的な傾向をおびることは避けられない。しかもこの書物は、論評よりも作品を肯定的に受け入れて鑑賞することに力をそそぐから、文体が前面に出る。ただ、同じ調子で全体をおおうので、歴史に触れ思想を論じるところでわたしに警戒心を引き起こすのだ。

読み進むにつれて、わたしは開かれた態度でこの書物を読むようになった。下巻も取り寄せた。

ところが、下巻冒頭の第十九章で、案内されて洗練の極みの『新古今和歌集』を鑑賞したあと、後半部分でまたとまどった。『愚管抄』に対する論評に違和感を覚えたのである。一見その解釈に理があるように見える。しかし、題材は歴史書で、そこでの歴史記述と作者慈円の見解に対する評価が主題だから、批判が十分であるか考えなければいけない。

導入部で、慈円の父や兄弟たちが摂政・関白になったことを紹介しながら、議論の要素となるはずの、父が保元の乱の一方の当事者であったこと（敵だった叔父は戦死）に触れていない。摂関家として所領を減らしたけれども、朝廷での最上位の地位を保ち、鎌倉幕府が成立してからもその地位を維持した家の慈円が、著者の言うような階級意識をもっていたことは当然である。しかし、その人物が、自分の家の悲哀と安堵のまじる複雑な思いと階級意識を超えて、「武士の世になった」と歴史の推移を正しく認識するのはやはり非凡なことである。慈円が歴史の「道理」を見つけたことを正當に評価すべきだ。

著者は、保元の乱についての慈円の記述を、『方丈記』や『今昔物語』の「時代の動向を見る目に比べても」、「政権中枢の動きに視野が固定されすぎている」と判定する。現代の歴史観を当てはめることをいさめているのに、この判定はじつは現代の見方を入りこませている。この比較は不公平でもある。『愚管抄』は、前二書とちがう事柄を扱う歴史書である。そして、近代以前の歴史書は、東洋でも西洋でも、政治史が中心課題だった。ナポレオンが皇帝になってヨーロッパに「支配層・非支配層を大きく包みこんで」展開させた歴史は、「権力中枢の内紛など」から始まったのである。政治史に深くかかわった家の人物が、自分の知っているその経緯を語るのは、歴史をゆがめていないとすれば、意味のあることである。事実、『愚管抄』は史料としても価値ある同時代史である。

激動の時代の背後に「社会全体の構造変化」があると著者が言うのは、たしかに一般的な真理である。しかし慈円の時代の歴史で、「無数の農民の動き」や「農村共同体の構造の変化」を前面に出すのは時期尚早だと思う。京都の皇室と藤原氏での兄弟間の内紛は、公領・荘園の個人的な利権化（私領化）が進行する中で、伝統的な氏族意識がうすれ家意識に変化していったことによる。権力中枢の人々の意識の底には、農地の支配形態の変化が影を落としている。その変化は在地の武士の管轄権の拡大・領地化と並行して起きた。そして、武士団の軍事力が旧支配層を圧倒することになったのである。支配形態の変化を慈円がどのくらい正確に概念化していたかは問題だが、実感していたのは確かだ。それが彼を、「武者の世になった」という苦い認識に導いた。ここで、土地と農民を支配する基本構造は変化していない。「農村共同体の構造の変化」や「無数の農民の動き」が変化の主要な局面ではない。

ところで『愚管抄』は、安定への途上にあつた鎌倉幕府を、京都側が転覆させようとする承久の乱を目前にする時期に書かれた。それが後鳥羽上皇の歴史の移行を無視する無謀を思いとどまらせるために書かれたという説の真偽はともかく、京都政権の人々に大局観を説く時論として見ても優れたものだったと言える。

人間の歴史は複雑である。一般的で抽象的な少数の概念だけでは粗い像しか描けなくて、歴史の多層性と人間の多面性をとらえそこなう、と思う。こう考えるわたしは、対象全体の大きさに対する書物の制約のせいで、著者の歴史批判がいくつかの章で十分ではなかったのだと思う。思想についても分量の制限が議論を制約しているのだろう。たとえば第三十章で江戸の儒学を評するのに、哲学である朱子学の本質と日本での受容について、哲学者が月並みなどとても短い記述しかないのに不満を感じた。この書物は、長谷川宏という人の理よりも情の側面を映し出しているのだろう。

見解の対立を際立たせる書き方になってしまったが、わたしはこの書物を否定しているのではない。日本の歴史上の美術や文学や広く思想の表現である文物を鑑賞するこの書物のよいところを受け取りそこなってはいけない、と思う。自分の非力を見ようとせずそれを棚に上げて、他者の手柄に難癖をつけようとするのが凡人の悪いくせだ。身を顧みて、自分を磨くことに力をそぐべきなのだ。道案内に導かれてこの列島に生きた先人たちのつくり出したものをたどり、そこに働いていた精神を考えることにしよう。

付記

本文は二〇一五年中に書き終え語句の推敲を残すだけになっていたのだが、年が改まって、辺見庸の『1★9★3★7』（金曜日）を読んで次のように思った。哲学者長谷川宏の思索にのぼった「日本精神史」は、詩人の鋭敏な身心をもつ辺見庸の自身へとぎりぎりとき刻みこむ思考によって釘づけにされた、と。二つの書物『日本精神史』と『1★9★3★7』のあとがきは、二〇一五年、国会が成文を書き変えることもせず再び憲法を変更しつつあったとき、前者が七月に、後者が九月に記された。